慈光

第三卷・第五號

昭和二十六年五月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可
（通第二十六号）

目次

聖德太子を讃仰し奉る……花田正夫（1）
信仰徹底懺悔談……近角常観（5）
歎異抄八・九章講話……福島政雄（8）
苦より樂へ……中野駿太郎（12）

聖德太子を讃仰し奉る

花田正夫

本年は聖德太子の千三百十年忌に際会いたしますので、磯長の太子の御廟を中心に国民的祭典が盛大に催され、各地に太子の御德を讃仰申すことでありますが、敗戦五年講和の問題も提唱されてゐる今日とて誠に意義深く慶びに堪えぬ次第であります。

惟ふに太子の御生涯は四十九年で誠にお短い歳月でありましたが、八聰耳王子の御名にふさはしく、宗教・政治・外交・文化等まことに縱横無尽に行くとして可ならざるはない御活動を遊ばされて、日本の基盤を初めてきづきあげて下されたのであります。その御德は今日なほ各方面の元祖としてあがめ奉つてゐる次第であります。然し太子の外にあらはし給うた御事業よりも、太子の御活動下された根本精神を奉戴申し度いのであります。

太子は御年二十、日本最初の女帝推古天皇の御時太子の位にお即きになつて攝政の大任を荷はれたのでありますが、外に朝鮮との和は破れ、隋の文化は隆盛を極めるに反し、日本の文化は誠に低調にして幼稚、加へて閥族は横暴その底を知らぬ狀態で、貧富の対立、同僚の嫉視、姦臣の拔扈、等々、国の内外共に手の下しやうのない大暗黒の時でありました。

太子はここに先づ太子御自身の眼を開くべき道を求められて、高麗の慧慈法師を師とされて勝鬘経、維摩経、法華経を奉戴せられて深く佛道に入られ、学ばれること二年、遂に玄意を体得せられたのであります。

太子御年二十四の時、百済の阿佐王子が太子に謁して、救世大慈観音菩薩と讃へ、且つは太子の尊影を書写し奉つた事実から推して、深く佛道の幽玄に徹せられた太子の自然の御德が、阿佐王子をして驚嘆おくあたはざらしめたことと思はれます。

又その後数年ならずして十七憲法を制定遊ばされて人々の帰趨を定められたのでありますが、私はここに太子の二十三か四の御時、恰も佛陀が三十六歳の御時の降魔成道に匹適する、大廻心があつたと信ずるのであります。長い夜の暗が東天に昇る旭日にかき消される如く、太子の心底に開け来つた大光明の下に、上下の秩序整然とあらはれ、左右の別また一絲乱れず、上下和睦、四時順行の大調和世界が顕現し来つて、太子の大活動の根源は定まり、太子の確信に伴ふ捨身の大行が

添ひ、国の基盤は着々と成就せられたのであります。

太子の根本精神

太子の偉業と聖德に関して讃仰申すことは大切なことでありますが、それだけでは唯英雄崇拜に終るのでありまして、太子の根本精神、中心生命の問題について讃仰申上げたいと思ひますが、これは前述の様に、太子が御身にかけて御証し下された「絶対信」の一つであります。

太子御滅後千三百年、佛教徒は「我がよき味方なり」として、無暗に太子を尊崇して自ら誇りとして来たのでありますこれに対し太子の眞精神を感知せぬ偏狭な国粋論者や神道者流は、太子を「佛教に姪する者」と謗り奉るやうな傾向が濃淡時節に応じてあらはれたのであります。

然しすでに「太子の絶対信」をいづれも理解せずして、或は味方とし或は敵方としたのであります。自ら力弱き者が他の強い力に向ふ時、何か味方として勝れた人を持ちたいのは世の常でありますが、斯る態度そのものが太子を奉じつつ、他に抵抗し他に誇る態度であつて、太子の絶対信より自然に建現する和に反逆して、太子の眞精神を破謗する者であります。斯る態度がやがて他をして対立的なものに転ぜしめることになります。

茲に太子の御胸に開かれた「絶対の信」について申し述べませう。太子のすでに信じ給うたのは「無限の大悲」であります。然も信順、帰依遊ばすことが出来たのは「無限の大悲」の不可思議力のために「調伏せしめられ給うた」のであります。

省みれば太子御自ら仰せられたやうに「共にこれ凡失のみ」のわれらに、絶対の善、無限の大悲が存在しやうはづはありません。相手の出方一つで常にグラック心しかありません、相手が喜んでくれないと、仕甲斐がないといつて愚痴をこぼし、遂には立腹して氷のやうな冷酷な心に転落して了ふので常に石が水中に沈んで行くやうに悪の方へ悪の方へと沈没して行くのであります。

斯くわれらに微塵も善に勝ち拔く力がないのでありますから「無限の大悲」を知ることも、同時に信ずることも出来ないのであります。このままでは永劫の大暗黒の外はありませぬ。然しここに唯一の救ひの道は、無限の大悲そのものが、われらの知り得ず、信じ得ない、尽未来際かけて浮ぶ瀬のないことを、かねてから御見拔き下されて、われらがそれをチットモ喜ばなくても、むしろいやがつても、更に反抗しても、なほさうした者故にあはれみをかけ、慈悲の涙をもつて、無限に向つて下さることによつて、遂には信ぜしめられて、我等が罪悪の深いことも知らしめられるのであります。

太子の御遺言である「世間虚仮、唯佛是眞」とはこの絶対信を簡明にお知らせ下さることであります。「世間虚仮」とは煩悩具足の凡夫のわれらは右に走り左に赴き、前に進み後に退くとも、相対虚仮の心しかない身として微塵も光明は見出し得ないとのことであり「唯佛是眞」とは、かかる虚仮不実の者を何処までも捨て給はずして遂に絶対眞実の御心もて、

悪を負かしとろかして了うて下さるのが、無限の大悲であるとのおこころであります。

太子が斯くも無限の大悲に帰し給うたのは、太子御自身が虚仮に徹せられてゐるからであります。言葉をかへて申しますれば、煩悩具足の凡夫、虚仮不実の身には、絶対の大悲、無限の大悲のほかにたすけられることは絶無であるとの御信嘗であります。この絶対信に立たれた太子には、他の教を見下げたり距てられるといふ心は毛頭ましまさない。天神地祇も知ろし召せ、諸佛諸菩薩もよろこびましませ、かかる虚仮の身、不実の者も、無限の大悲に調伏せしめられて、淨界に悲引されて参りますとの大感謝の御心であつた。

この御慶びが、憲章第二において

「無限の大悲を篤くうやまへ。生きとし生ける者のつひのよりどころである。国といふ国はこれ一つにたすけられる外はない。いかなる時世でも、いかなる民族でも無限の大悲を尊ばない者はない。如何なる悪業強き者も無限の大悲のたえざる眞実心に遭へば、遂に己が悪を懺悔して信順するであらう、世間にこの無限の大悲を打ち負かすものはなく、かへつてこちらが打ち負かされて了ふ。若し無限の大悲が徹到しないならば、我等が枉れる心は永劫に直うされる日はない」

と、ひとへに絶対信をお勧め下されてゐられる。茲には宗派的偏見もなく、民族国家の隔てもましまさず、善悪邪正の相対心はそのまま虚仮として無限の大悲に救はれてゐられる、とろかされてゐられる。我こそ是なりの思ひは大悲無限に消滅せられ、我は悪しとの卑屈も無限の大悲に満ちたらはせ給うてゐられる。大悲圓満の御尊顔こそ救世大慈観音菩薩と拜し奉ることであります。

嗚呼思へば大聖釈迦牟尼世尊は人界に初めて無限の大悲、絶対の大悲を持ち込まれたのでありますが、聖徳太子は日本に始めてこの無限の大悲を持ち込まれた方であらせられました。親鸞聖人が

○和国の教主聖徳王　広大恩徳謝し難し　一心に帰命し奉り　奉讃ひまなく努むべし

○無始よりこのかたこの世まで　聖徳皇のあはれみに多多の如くすてずして　阿摩の如くにそひたまふ

と衷心より讃仰遊ばされたのも亦むべなる哉であります。太子は唯単に佛教を日本に入れ、これを外形的に信奉し給うたのではなく、佛道の眞意絶対の御眞実、無限の大悲を御身をもつて信嘗し玉ひ永く後世に化を垂れて下さつたのであります。実に「和国の教主」にましまします。然も無限の大悲は太子を縁として、慈父、慈母の御心となつて無限によるべなき衆生を抱き、苦悩に満ちる世間を安慰し給うて、天地と共に窮まりなく照り輝いて日本を護り、人類を温めて下さることであります。

太子の霊前に懺謝し奉る

顧みればかくも尊き聖太子の御垂訓を頂きながら、我等まことに憍慢に走り、懈怠に堕して、御眞意を奉戴せずして今日の日本の惨状を現出致しましたことは、太子の御霊前に懺

死してなほ足らぬことであります。なほまた敗戦と共に卑屈に堕し、無定見に陥ち、唯己が生きることのみに汲汲として徒らに享樂主義に其日を消し去ることは、太子の御心をいかばかりいたましめ奉つて居ることでありませうか。

「無限の大悲」と「絶対の信念」。これこそ太子がこよなきものとして永遠に我等に賜つた遺産であります。星も月も太陽の光明をうけて光を放ち、草も木も人も太陽の温熱を蒙つて生々発育する如く、無限の大悲、絶対の大悲こそ、人も国も、善人も悪人も、時の古今なく、洋の東西なく、唯一無碍の光明を放つて常に救済してやみ給はぬのであります。「無限の大悲」のおのづからなる建現としての「絶対の信念」こそ、我等がつひのよりどころであり、我等が一切活動の淵源であります。

太子すでに逝きまして千三百三十年、磯長の古松は颯々として古人を語り、富の小川の水は哀々として太子の遺風を伝へてやまぬことでありませう。

我等また太子の御精神に常に反し常に叛いてやまぬ身を懺悔し奉ると共に、太子が唯一の御遺産たる無限の大悲を渇仰し奉つて、太子の慈心の愈々哀愍を垂れ給ひ、我等が身を覆護（アガゴ）し給はらんことを仰いでやまぬ次第であります。

常陸法龍寺

福島政雄

法龍寺や六百年の大銀杏如信上人の御墓淋しき

歎異抄有縁の知識の御墓守る御堂跡なく春草のしげき

大銀杏仰げば悲し六百年有縁の御墓訪ふ人のなき

雪の日に如信の御墓訪ねまして歎きましけむ我が師常観

大銀杏如信の御墓にしみじみと歎異の抄の御教をおもふ

終焉の霊地に立ちて親鸞の御孫如信の御こころをおもふ

遠つ御祖如信の御墓は鄙に荒れて本願寺ひとり京に栄ゆる

信仰徹底懺悔談

近角常観

信仰の徹底味は実験の告白でなければ、その眞相を語ることは出来ぬ。今思出の儘二三入信者の懺悔談を物語つて見やう。

一

或信者が律法的の俗諦門を聞きて、兎角悪い事が止まぬことを苦にして居つた。然るに一日会館へ来たりて講話を聞いた処「悪い心がやまぬ者を可哀想と思召して、飽くまでお見捨てなき大慈大悲である」といふ事を聞いて大いに喜んだ。併しながら其の聞き様は徹底してゐなかつた。今までは悪い心の止まぬのを苦にして居つたが、止まぬのを可哀想と見て下さる故、悪い心を止めいでもよいと安心して大いに氣樂になつて居つた。これは知らず知らずの間に悪くてもお助けの悪無碍に陥つて居たのである。

然るに或時会館において、講話を聞きたる時、「悪い心を止めいでもお助けといふは、止めれば止められる者のいふことである。悪いことを止めいでもよいではない。悪いことを止まらぬ者を可哀想と思召し下さるのである」といふことを聞いてハット突き当つてしまつたのである。悪い心が止まぬのを可哀想に思召して下さるならば、悪い心を止めいでもよいではないか、全体「止めれば止められる者のいふ事ぢや」といふは如何なる意味であるか、トント解らぬ。

それから後は從来解つたと思うた事がサツパリ解らなくなり、家に居て食事する時も「止めれば止められる者のいふ事ぢや」と独語をするやうになり、道を行くにも電信柱に突き当る位に、眞剣にその事ばかりを考へるやうになつた。

然るに其後其家の前に小店があつて、一人の娘がカリエスの爲に不具になつて居た。或時年頃の娘達数人が着飾つて、其店の前を通りかかり、不具の小娘を見て互に指さし笑ひ罵りて、あのをかしき不具を見よとて振返り振返り通り過ぎた。其時其娘はワツト泣いて母の許に走つて訴へた。そこで母は血相かへて町に走り出て、彼の娘連に向つてどなつていふやう「其の様に片輪々々と言うてくれるな。此の子は生れながらの片輪ではない、病氣で片輪になつたのである」と罵り返して小娘の処に来たりて涙ながらに慰めた。

「お前が片輪なればこそ、お母さんはお前を可哀想に思う

て、昼夜忘れる暇がない、たとひ他人が如何いはうと、かまはぬではないか」というて居るのを其信者が傍に居て見聞した時に始めて氣がついて、あゝあの片輪の小娘が私であつた、悪い心の止まぬといふが私の片輪であつた。其悪い心の止まぬ片輪の私を可哀想に思召して飽くまで御見捨てない親様が如来様であると感泣した。

ここで始めて飽迄悪い心の止まぬのを可哀想に思召し下さる大慈大悲に徹底した。今迄それであるから悪い心を止めいでもよいと高上りをして横着になつたは、大きな誤りであつた。如何にも止めいでもよいといふは止めれば止められる者のいふことであつた。止めやうにも止められぬのが私の片輪であると自覚して、茲に徹底したる罪悪觀を生じ、機の深信が解ると同時に、絶対の大慈大悲の下に懺悔慚愧したのである

かく如何な片輪者も、親様の大慈大悲に満足して見れば、人生は是一つで満足である。他人が片輪と罵らうとも、毫も氣にかゝらぬやうになつて来る。これが唯一絶対の大慈大悲によりて救済されたる徹底味である。

二

或姑が嫁を伴つて会館へ来聽した。其姑は從来説教をよく聽聞した人である。併し嫁は未だ一向聽聞せぬ人である。然るに或時の講話に「われらは表面は仲よくして居れども心の中では隔て心があつて、五分五分の止まぬ人間である。其隔て心の止まぬのを可哀想に思召して向ふより隔てゝ下さらぬ大慈大悲が、如来の親心である」といふことを聞いた。

嫁なる人が之を聞いて、大いに驚いた。自分は母に伴つて從順にしてゐるけれども隔て心の止まぬ者である。然るに此方より隔て心の止まぬのをお察し下されて、向ふより隔てゝ下さらぬといふは、何たる事ぞやと、忽ち徹底して懺悔の心禁じ難くなつた。

家に帰つて嫁が姑の前に両手をついてあやまつて告白した。今迄は口にいふことの出来ない悪い心を持つて居りました。今後は何卒眞の娘と思召して導いて下さい、私も眞の母として仕へたいと思ひますと懺悔した。

これを聞いた姑は大いに驚き、其様なことはいふて下さるな。私はもとよりお前を眞の娘と心得て居る。今更変ることはない。と返答はしたれども、如何にも爾来嫁の態度の一変したるに驚き、秘に会館に来たりて、其の次第を物語りていふ様。私は何やら嫁に先がけられた様な氣がする。私が嫁を導いて聽聞しながら、嫁が先に戴いた様である。お恥かしいことである。何卒私にも聽聞さして下されと訴へた。

そこで私が其姑に向つて尋ねた。嫁があなたに向つて申訳のないことを考へて居つたといふのであるが、それにあなたは少しも悪いことは考へて居らぬ、眞の娘と思うて居たといふは、些か合点の行かぬことである。人間は五分五分である。嫁が隔て心を持つて仕へて居るにあなたは少しも隔てぬといふは虚言であらう、と遠慮なく突込んだ。

姑は大いに驚き、成程表面は娘同様と考へて居つたけれど

も心には自分の貫はうと思つた嫁ではなかつた、と内心を告白した。そこで私は其内心を見通して、しかも其様な隔て心の止まぬ者を、飽くまで隔てたまはぬ大慈大悲であるといふことを話して姑も亦徹底して懺悔した。

抑々嫁なる人は姑の態度如何にかゝはらず、自分が徹底すれば此の如く絶対秩序精神が建現して、姑の前にあやまるのである。絶対の信仰は、自分自身の事である。姑の如何は問題にならぬのである。これが信仰が徹底すれば、絶対の秩序を生ずるといふ一例である。

三

拝啓、過日上京の際、御見舞のため参堂致し候処、却て長時間に亘り御懇諭を賜はり、其上翌日の座談会におきても、御発病以来始めての御出座にて、御疲労の程も案ぜられ候にもかゝはらず、長時間有難き御示教を蒙り、感銘此事に存じ奉り候。

自己の苦しみが五分五分の根性に基く事、其根性が止めんとして止められぬ事、有りても構はぬを棄て置かれぬ事、かくの如くして進退きはまれる私が、五分五分離れし絶対の御慈悲に依り救はるゝものなる事は、かねて御文献により、概念的にはほゞ承知致し居り候へども、此度の御化導により、且つ御慈悲を直接に浴びせられ、千萬年結んで溶けざりし私の煩悩の氷も、茲に初めて日光に直面して溶け初めし心地いたし、当時の有難き光景、今なほ眼前に髣髴たる感致し候。

一面よくよく私の心を内省仕り候に、私の氷の氷結作用は実に激しき者にて、日光に直面して刻々に溶かされながら、餘りに氷結が激しき故、溶かされつゝある事実をも、兎もすれば疑はんとする傾向これあり候。勿體なき限りに御座候。かゝるしぶとき者にこそ、いや増しに加はり給ふ御慈悲ぞと思へば、細々ながら敬虔感謝の念も浮び念佛申候次第に御座候。

上述の如き私に候へば、所詮間断なく聞法求道仕り候ほか、行くべき道はこれなく、何卒この上ながら御育ての程願ひ上げ候。なほ御病體御加養専一に遊ばされ度、御令閨様へも宣敷く御伝へ願ひ上げ候。

昭和九年十一月二十日、　信界建現誌。

歎異抄八・九章講話（二）

福島政雄

さふらふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきこゝろのさふらはぬは、いかにとさふらふべきことにてさふらふやらんと、まうしいれてさふらひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯圓房おなじこゝろにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり、地にをどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり。よろこぶべきこゝろをおさへて、よろこばせざるは煩悩の所爲なり。しかるに佛かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおほゆるなり。

この第九章といふのは、私共若い時、最初に親鸞聖人の教に目をさませていただいた時にはあまり有難くない感じがしたのであります。何だか生ぬるいといふやうなことをいつてあるやうな氣持ちが致しました。第七章の念佛者は無碍の一道なりといふ所をみますと非常に共鳴致しますが、第九章の方はどうも生ぬるいといふやうな感じが致しました。なかなか最初にはこの章がピンと来なかつたのであります。

それがだんだん後になるほど色々な生活上の経験に出合ひまして自分がどうにもならんといふことがだんだん解つて参ります。そうすると第九章の味ひといふものがだんだん出てくるといふやうなことでありまして、私もふりかへつてみますと、二十六歳の夏に親鸞聖人の世界に目がさめ始めて、近角先生の御育てを受けて、凡そ十年間位は何だか偉い、自分は信仰に入つた、大いなる信仰の境地が開けた、この信仰の上から何でも即座に解決出来る、といふやうなこの変に思ひ上がつた心持が続いてをつたと思ひます。

ところが四十歳に近づく、四十歳をこえる、こうなつて参りますと、その間に色々生活上の自分の煩悩関係の問題が起つて参ります。そうすると、だんだん五十に近づくといふことになつて来ますと、さて自分は最初の十年間ばかりは余程信仰が開けてゐると思つたが、然しあれは信仰問題に就いての自分の傲慢性が其処に動いてゐたにすぎない。自分は現実の凡ゆる問題に当面して、自分の煩悩に苦しみその解決を求めやうとすると、そうすると信仰の上から直ちに解決出来るかといふとなかなかそうはゆかない、苦しんで苦しんで悩んだ揚句にやつとこのお念佛によみがへつて来るといふやうなことで、自分の信仰の境地といふものは、頭の上では、どんな綺麗なことを考へ、口ではどんなにうまく言つてゐるにしても、実際の自分の悩みといふものはなかなか口でいふやうにうまくゆくものでなくて、ひつかゝり通しであり、つまづきの継続である。そうして僅かにこのお念佛の上で心を和らげられ、導かれていつて居るにすぎない。

こういふことにだんだんなつて来まして、今度は五十、六十になると一層そうなつて来まして、始めの十年間の反対の心持ちになります。だんだん年取る程自分は手も足も出ない。念佛の上でどうやら心が和げられて続いてゐるけれども、自分は非常に立派な信仰を持つてゐるなんて言へたものではな

い。こういふ風にだんだんなつて来ましたのであります。

ある時、昔の人の語録を輯めたものを読んで見ますと、自分はこんな有様では、どうなるかどうなるかといふ思ひが、どうもなかなか止みません、それでどうでございませうと或る信者がお尋ねした。すると、いやその思ひが大事であつて、その思ひがあればこそ御信心が続いてゆくのである。信心相続といふのは、そういふ自分は之では駄目ではないか〳〵といふところで相続してゆくものだといふやうな事を語録で読みまして、成る程そういふものか、自分の現実が矢つ張りそういふことになつてゐる、といふことを深く感じましたことでありまして、言葉通りに覚えておりませんけれども、その印象はづうと続いて残つてをります。

それで第九章には唯圓房が親鸞聖人にお尋ねしてゐる。念佛を申してをりますけれども踊り立つやうに喜ばしいといふ心は一向に起りません。急ぎ淨土に参りたいといふ心はちつとも起りません、これはどんなものでありませうか。つまりこの信仰の境地が開けて始めは非常に鮮やかに思ふけれども、その後にどうも自分の生活の上の味ひが鮮やかなものではない。あの時御信心が開けたと思つたのは間違ではなからうか。今日の自分の有様は極めて微温的であるがどうであらうか。こういふ氣持が信仰生活の相続の中におこつてくる。だから唯圓房も其処を尋ねるわけであります。

そうすると親鸞聖人から駄目ではないかと叱られはしまいかと思つてお尋ねしたわけでありましたが、聖人は「親鸞もこの不審ありつるに唯圓房おなじこゝろにてありけり」此処に唯圓房が生かされる根本があります。そんな有様であつてはいけない、もうちつと鮮やかな信仰をふりおこせと言はれさうに思つてゐたが其処に「自分も同じだ、同じ不審を持つてゐたが唯圓房も同じ心持ちだと」とこう言つてゐられる。

そうしますると唯圓房の心持ちの中には何ともいへない暖かさを感ずると言ひませうか、感ずると言ふよりか、沁み出して来るやうな心持になつて来たに違ひないのであります。そして「よくよく案じみれば天におどり、地におどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり」それは私共の心、感覚からがさうです。物理学なんかで聞いてゐられるやうに目で見る範囲といふものは決つてゐる。或る範囲以上の光線といふもの、赤外線とか紫外線とかいふやうなものがあるけれども、それは我々の目では感じない。耳もそうでありまして、或る程度までの振動数の音は耳に感じますけれども、それ以上になれば、もうそれに対する感じを我々の耳は持たないといふやうな事は自然科学的な研究が教へる所でありますが、実際の私共の狀態もそういふものでありませう。或る範囲に対しては感覚性を持つてをりますけれども、それを超えると実際に私共に大きな働きが及んでをるけれどもそれを感じない。それだからこの心の喜びといふやうな事もさうであるが、私共の喜びとして感ずるものは或る狀態の範囲にすぎないのである。広大無辺なる恩とか慈悲とか智慧とか、そういふ働きになると

存外感じないでゐる。

「よくよく案じみれば、天におどり地におどるほどに、よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふべきなり」。「よくよく案じみれば」これは頭で考へてみまするとと、実は天におどり地におどるほどに喜ぶべき筈だけれども、実際の自分はそういふ喜びの感じといふものを持たない。だから我々の感じうる喜びの範囲といふものは実は狭くて言ふに足らぬものであつて、頭では考へられる広大無辺なる御慈悲とか御恩とかいふものを直接にはちつとも感じてゐないやうな我々の現実、いかにも浅間しいと言ひませうか、浅薄なものであります。つまり人間、我々の心といふものは非常な限られたものであつて広大無辺なる働きとか力とかいふものは現に自分に働いてゐるのに解らぬ、それだけの事が考へてゐると頭では考へ得る。「よくよく案じみれば」そうすると、其処で自分の現実の命といふものは非常に限られた小さい世界のものであるといふことが解る。それで自分では解らぬが広大無辺なる佛陀の誠の働きといふものが自分に常に働きかけ、自分に働いてゐて下さるものである、こういふふうに思ひかへして来る「愈々往生は一定と思ひたまふべきなり」そう思はなければならぬ筈だけれども、その感じは今日自分は必ずしも持つてゐない。考へてみればそういふ広大なる御恩が我身に及んでゐるのである。我身を哺んで下さるのである。

何故こういふふうに我々の生命といふものは限られたる世界の煩悩の所爲である。我々は煩悩の塊りのやうなものである。煩悩故に自分といふものを狭く限つて広大無辺なる働きの感じといふものを一向受け入れてゐない。ところが佛陀の方ではそれをあきれもしないで、我々の浅薄な狭い命の姿といふものを、そういふものだと、佛陀の方から「かねてしろしめして煩悩具足の凡夫」と仰せられてゐる。そうすると成程煩悩具足の凡夫であつて極めて浅薄なもので、感ずべきところも感じないでゐるといふ所がどうやら解る。

そうなつてくると佛陀の悲願といふものは大悲の願といふものは、そういふふうの浅薄な限られた世界、小さい我等のため、そういふふうの我等を一層憐んで、そういふ有様であるが故に、見捨てられぬといふ佛陀の誠が我々に徹して下さる、そうであつたと知られると「いよいよたのもしい」といふ心持になつてくる。

つまり広大無辺の慈悲といふものが自分の觀念で理解し得る範囲のものであつたならば、たのもしさと言つてもたのもしさの程度がわかるわけでありますけれども、自分に解らぬ広大無辺なものであれば、其処にすつかり寄りかゝつてゆけば無限に其処に信頼が出来るといふことになる。自分の心の及ばぬ世界であればこそ、其処に無限の信頼が出来るのである。自分の心で解る位の事ならば、この人にはこれ位の事迄は信頼出来るけれども、これ以上の事は駄目だといふことになる。現実生活の人間関係といふものはそんなものでありま

す。

同じ友人といつてもあれには氣が許せないが、これにはもう少し信頼してもいいといふやうな事を考へて、私共は、友人にわけへだてをして、自分の親しい友人であつても、その友人にけじめをつけて信頼の度合といふものを考へてゐる。そういふ極めて相対的な生活をしてゐるわけであります。つまり無限の信頼といふものは人間の上にはあり得ない、兄弟であつてもそうであります。この兄弟には非常な信頼をおいてもいいといふことを考へてゐると存外、或る場合にそうはいかぬといふことになつて、辛棒しなければならぬといふやうな事は私共のよく経験することであります。だから自然人間といふものが極めて相対的な信頼しかお互に持たないといふ窮屈な世界に住んでをるといふことになつてをります。

この窮屈さ、人間相互の関係の窮屈さだけでいつたらどうしてもやりきれない、何処かに私共無限の信頼を打ち込むやうな、そういふ世界を求め度い。これは私共の心に銘々持つてをる心持であります。人間の関係においてそれらを得られない、つまりこの人生といふものは、どんな親しい間柄であつても、無限の信頼といふものを置き得るものではないといふことが色々な現実問題にぶつつかつて解つて参れば参る程、私共の心といふものは無限の信頼をなし得る世界を求める、これは実際の有様であります。

その無限の信頼の世界といふものが佛陀の世界、佛陀の誠の世界として我々の命の上にひびいて来る、念佛がそれである。又その久遠の誠の佛陀の命に入りてこそ、私共がお互の人間関係の極めて有限相対であることに目がさめて、それをそれとしてあきらめて行くことが出来る。そうでなければ私共は人生の生活において失望また失望でありまして、失望といふことは私共が耐えきれないことでありますからして、だから久遠の御慈悲にふれておればこの次から次へと経験してゆく人生の様々の失望、ある場合には心労、そういふ所を耐えてゆく。そういふ人生に心を落ちつけて、そして自分の爲すべきことを続けてゆくことが出来る。

だから久遠の佛陀の誠との絶対関係、それから人間同志の相対関係とが別々でなくて、相対関係の上に行きづまつて失望し或は心労するといふことになるにつけて、益々絶対の誠といふもの〻味いといふものを我身の上にいただく、こういふ関係になつてくる。人生と信仰とがそこに一つに結びつくのであつて、人生は人生で相対的だ、信仰は信仰で絶対的な美しい世界にゆくのだといふのではなくて、この相対的で何ともならぬ人生そのもの〻苦しみなり不平なりの上に、この絶対の誠を我身に受けるといふ所から、どうやら自分が生きて働いてゆく、そういふ心持が第九章に流れてゐるわけであります。

信仰を得れば非常な心の力が出て来て、人生の事総てがテキパキと滞りなくやつてゆける、信仰の効力といふものはこういふものだといふやうな事を始めは考へてゐるかも知れないけれども、だんだん人生の経験を積んでゆけば、そんな事はいへない。そしてだんだん第九章の世界にはいつてくるわけであります。

以下次号

苦より樂へ

中野駿太郎

百八十度の廻轉

私たちが心に苦を感じる。それはどういふ時に苦を感じるかといふに、清沢満之先生の言葉をかりて言へば、外物（がいぶつ）と他人に求め、それが自分の意の如くならなかつた時に苦を感じるのである。

外物とはそとのもので、名利といふ。名誉や利益や、その他、人をぬきにした一切のものをいふ。他人とは自分以外の他の一切の人のことで、この場合親兄弟も、妻子もみな他人のなかに入る。「黄金萬能」といふが、実際金があれば、ほしいものは大抵買へる。新聞の社会面の記事を読むと、随分むごたらしい殺人事件など次々に報道されてあるが、その大部分は金がほしさに人を殺すのである。

「金にうらみがかずかずござる」といふが、金のためにいろいろな悲喜劇がおこる。

またその金錢上のことが人に連関してくる。そのために人を恨むこともでて来るのであるが、それ等のもやもやしたあらゆることは、これみな迷ひの境界におけることである。苦を感じるといふことは迷いの境界にあるからであつて、迷いの境界から脱して悟りの境界に入ればそこには苦はない。

「転迷開悟、離苦得樂」といふ。迷ひを転じて悟りを開き、その結果として、苦を離れて樂を得る、それが佛教の目的である。佛教といへば、このほかには何もない。キリスト教に対抗するために、佛教は科学的であるとか、合理的であるとかよく言ふ。もちろんそういふことを佛教といふものを客観的に見て論ずることも、結構なことである。しかしいよいよのところは、やはり、自分がこの佛教によつて、どのやうに苦を離れることが出来たか、そこ一つを、自分の体験の上から言ふことが肝腎であると思ふ。

肉体をもつてこの世にあるかぎり、誰しも苦を感じないものはない。それでその苦を感じたとき、それをどう始末したらよいか。すでに苦を感じたとき、心は迷ひの境界にあるのである。言ひかへれば、凡夫の心境にあるのである。凡夫とは迷ひの人間といふことである。凡夫は迷ひのかたまりであるから、迷つてゐるのは当然であり、したがつて苦を感ずるのは当然である。ところで佛陀は、凡夫にはその迷ひが、その苦が、やまぬものと見て下されたのである。その見て下されたといふ、そこにぶつかつて、ここに百八十度の廻転がなされる。

汝自身を知れ

佛陀が、凡夫は迷ひのやまぬもの、苦のやまぬもの、それがやまつたら凡夫でないと、そこを見て下された。ここ一つがわからせて頂けば、いまいふ百八十度の廻転がなされて、ここにはじめて自分の醜い姿を見せてもらふことになる。「汝自身を知れ」とか「己を知れ」とかいふが、たれしも自分の本当の正体を見ることはできない。しかし、この佛陀が見て下されたといふ、ここがわかれば、自分の姿が見へる。ここを近角先生は「ただごとではない」と言はれる。

自分に着してゐたのでは、自分の姿は見られない。それは自分が富士山に登つてゐる間は、富士の全景を見ることが出来ないのと同様である。富士山を見ようと思つたら、遠くはなれてからこれを見なければならぬ。それと同時に、富士山を見たときは、見てゐる自分は富士山から離れてゐるのである。それと同じ理窟で、自分の正体を見やうと思へば、自分を離れなければならない。

しかし自分で自分を離れることはできない。また自分で自分から離れやうと思ふのは、わが身知らずの骨張である。ところが佛陀は、そのやうに自分から離れることのできないところを見て下されたのである。そしてそこを見られたから、そこをあはれむといふ慈悲の心がでられたのである。これが佛陀の智慧であり慈悲である。それでそこが頂ければ、自分の醜い姿が見せてもらへるのであつて、そこから懺悔の心と感謝の心とがおこつてくる。

それでそうなつたとき、或る意味において、迷ひを転じて悟りを開いたことになる。悟りを開くといふと、はなはだ大それたことに聞えるのであるが、とにかく迷ひの境界、苦の境界から、悟りの境界、楽の境界にひきとられる。

尽十方の無碍光は
無明のやみをてらしつつ
一念歓喜するひとを
かならず滅度にいたらしむ

無明の闇の中をさまよつてゐる。そのために苦しんでゐる。しかしそこから脱することのできないことを見て下された。その智慧、その慈悲、それが「尽十方の無碍光」である。そしてそれをわからせて頂けば、一念歓喜せずにはゐられなくなる。そのとき今言うた苦の境界から楽の境界に引きとられ

るので、それがこの「かならず滅度にいたらしむ」である。

滅度とは梵語でニルバーナー（涅槃）の訳である。すなはち生死の苦を滅して、煩悩の潮流を渡る意である。そしてそれは何も死んで後のことではない。生きてゐる今、その佛陀のお慈悲を知らせて頂いて、一念歓喜したときである。もちろん専門的に言へば、現当二世の利益といふのであり、またそれを決して否定するのではないが、なんにしてもいま現に、この世でこの利益の一分が得られる。そこがまことに有難い。

意義ある人生

そこでひと度そういふ有難い身にさせて頂いたらどうなるかといふに、衣食住が念佛の助業となる。もともとこの自分といふものは、肉体をもつた煩悩具足の凡夫なのであるからたえず苦を感じるのであるが、その都度、お慈悲にひきもどされては自分の醜い姿を見せて頂いて、懺悔と感謝との心に立ち帰らせて頂くのである。

ここに至つて、この人生ははじめて意義ある人生となる。自分はなんのために生きてゐるのか、実にこの大なる光明のあることを自ら味ひ、人と同じ喜びを得させて貰うために生きてゐるのだといふことになる。それはこの世に生きてゆくかぎり、着物もきねばならず、食べものもたべねばならず、家にも住まはねばならない。しかしそれは自分の欲のためのみにそれを求めるのではなく、念佛申すそのための衣食住といふことになる。

衣食住、いはゆる外物によつて楽しみを求めやうといふ心がおこつたとき、もうその心は迷ひの境界に堕してゐるのである。他人によるのも同様である。そこは苦の世界である。そこから一刻も早く、足を洗はなければならぬ。それはそのやうな心が凡夫にはおこる、それがおこらねば凡夫ではない、凡夫なればかならず起ると、そこを見て下されたお慈悲に、またもとの楽の世界、涅槃の境界、佛の慈懐に、戻らせて頂くのである。苦の世界を楽の世界のやうに思ひあやまる、それが凡夫の錯覚である。しかしまた、この錯覚以外には凡夫の心はない。

無明長夜の燈炬なり
智眼くらしとかなしむな
生死大海の船筏なり
罪障おもしとなげかざれ　（正像末和讃）

この錯覚、無明長夜、そこをあはれんで下さる佛陀のお慈悲、そこをやるせなく思うて下さる佛陀のお慈悲一つに救はれて、この錯覚から解脱させていただくのである。

編集後記

あらとうと青葉若葉の陽のひかり　芭蕉
ゆく春のあとを濁さぬ青葉かな　蕪村

新緑の候となりました。昨年は紀州の南岸の旅をして「目に青葉」と嘆じた翁の句を新緑濃き山々の姿に泌々と懐しんだことでありますが、爾来一年の蓬戸不出の生活、再び春陽を迎へました。御蔭で一週間に一度、一日旅行を許されました。小供のやうに喜んで居ります。

天地の惠み、友の御情けを厚く御礼申上げる次第であります。先月号は印刷が遅れましたので大事輪で御手元に発送いたしましたが御心配おかけ申したことと併せておわび申上げます。

◇

▼近角先生の「信仰徹底懺悔談」は信界建現誌から頂きました。先生の御生涯を通されまして、佛陀の広大な御眞実を告げ知らしめて下されたのでありますが、その広大な御眞実がそのままに徹到されますことは全く不可思議の事であります。御味読を御願ひ申上げます。

▼福島先生の歎異抄九章の御講話は前半で終り、次号に後半を載きます。入信時の喜びを春の爛漫たる花にたとへますれば、信后の相続は澄みきつた秋空に見る底光のするものがあります。前者は嘆びの中にも浮き〳〵した調子があり、後者は確かりと足の地についたたのもしさが味へます。先生の御講話はその点を明瞭にして下されてあります。

▼中野先生の「苦より樂へ」は苦悩の有情をみそなはして無限の慈悲を注ぎかけて下さる、佛力自然の転化作用であります。かねて見てとつて下さる御眞実は、我等として唯不可思議と仰ぐ外はありません。唯佛独明了二乗非所識、まして善悪の凡夫としてはからうところではありませぬ。

▼「聖徳太子の讃仰」は千三百三十年忌をお迎へした私のよろこびの一端を誌しました千三百年忌にも国をあげて御讃仰申したことでありますが、当時の私は馬耳東風で夢中に過し去りました。次の御年忌には最早私の生命がどうなつているか知れません。

無限の大悲をいただかれた、絶対眞実の信こそ、尽未来際をかけて不滅の燈火を掲げて下さることを篤く信じ奉る次第であります。

◇

執筆者　御住所

福島政雄、　横須賀市田浦局区内　谷戸六六二
中野駿太郎、　東京都世田谷区世田谷　四ノ七四〇　（勝光院）

◇

★福島先生著書紹介

「和国教化論」定価七〇円送料十五円。発行所、名古屋市熱田区三本松町三ノ一。愛知書房。振替名古屋五八九八八番（慈光社で御取次します。）

「求信の一路」定価一五〇円、送料二四円発行所、京都市下京区花屋町西洞院、永田文昌堂。振替京都九三六番。

昭和二十六年五月十日印刷
昭和二十六年五月十五日発行
毎月一回十五日発行
定価　一部金拾五円（郵税共）
一年分金百八拾円（郵税共）

名古屋市南区甲上町二ノ二八
編集兼発行人　花田正夫

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄

名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷所　千草印刷所

名古屋市南区甲上町二ノ二八
一道会館
発行所　慈光社
振替口座番号　名古屋一〇四七〇番